

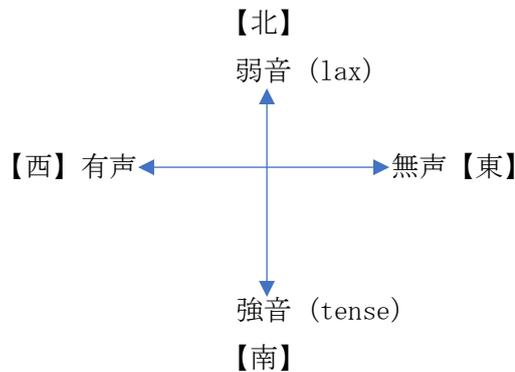
満洲文字の文字表をめぐって(14)

—音価(4)子音：歴史資料に見る破裂音破擦音の音質—

吉池孝一 中村雅之

はじめに

中村：前回の議論の最後に下記の模式図を提示しました。これは現代の言語調査資料に見る破裂音と破擦音の音質から想定したものです。



吉池：西の有声というのは、新疆ウイグル自治区の錫伯語が有声音と無声音で対立することを示し、東の無声というのは、黒龍江省の満洲語が無声有気音と無声無気音で対立することを示します。

中村：東には無声化という“地域特徴”が有りそうだということでしたね。

吉池：主要な内蒙古語や、満洲語、漢語には有声音が無く無声化しており、これを地域特徴と見ることができる。黒龍江省の満洲語が有気音と無気音で対立するのは、そのような地域特徴の中での出来事と見るということでした。

中村：以上は東西の話ですが、南北に目を移すと、弱音 (lax) と強音 (tense) の分布がありそうだ、ということでしたね。

吉池：漢語北方方言と主要な内蒙古語、及び黒龍江省の満洲語は、無声無気音と無声有気音で対立しているのですが、無声無気音の音質として弱音 (lax) を認めることができます。他方、漢語吳方言や広東語の無声無気音は強音 (tense) とされます。南に位置する諸言語の音質がどのようなものであるか今後の課題です。

なお、東西南北の模式図としましたが、諸言語の音質を確認するまでは、別の角度から見て、「アジア北東の地域特徴として、無声化と弱音化がある」としておいても良いかもしれ

ません

中村：模式図は見通しです。一定の見通しを以って眺めるならば、見えなかったものも見えて来る場合があります。いずれにしても今回は、『満漢字清文啓蒙』（1730年題）など過去の資料が、有声と無声、強音と弱音のいずれの特徴を示すか検討するということでしたね。

### 『満漢字清文啓蒙』（1730年題）の漢字音

吉池：『満漢字清文啓蒙』（1730年題）の第一字頭の破裂音と破擦音に現代北京語音を付すと次のとおりです。『満漢字清文啓蒙』の著者の第一言語が漢語であったか、それとも満洲語であったか、判断は困難です。しかし、満洲語音と漢語音の相違に就いて様々な配慮をしており<sup>1</sup>、正しい満洲語音の習得を目指し、工夫が凝らされている学習書であることは確かです。

Ka 喀康[k<sup>h</sup>aŋ]呀[ia]切  
ga 噶剛[kəŋ]呀[ia]切  
ko 顆空[k<sup>h</sup>uŋ]窩[uo]切  
go 郭[kuo]  
kū 枯[k<sup>h</sup>u]  
gū 孤[ku]  
ba 八[pa]  
be 撥[po]  
bi 逼[pi]  
bo 撥[po]  
bu 不[pu]

---

<sup>1</sup>第一字頭に依って見ると次の通り。まず単語の配列に工夫が見られる。見出しの音節があり、その下に、当該の音節を語頭、語中、語末に含む単語を順に配する。工夫はそれだけではない。見出しの音節 ha の下に、ha を含まない単語「aga 雨」がある。これが『清文啓蒙』の著者の意図的な処置であることは、その単語の右の行間に満洲文字で ga と注記して、ha では無いことを明示することから分かる。単語「aga 雨」と、単語「aha 奴才」との対照を通して、漢人が間違えやすい ha と ga の違いを明示するためである。g+母音と h+母音に、このような工夫が集中している。

①見出し ha の下・・・ha を含む aha と、ga を含む aga を配する。

②見出し ho の下・・・ho を含む tohoma と、go を含む forgošoho を配する。

③見出し hū の下・・・hū を含む uhūku と、gū を含む agūra を配する。

これらの工夫は、母音 a, o, u の前、すなわち男性子音字の g と h に見られるが、母音 e, i, u の前、すなわち女性子音字の g と h には見られない。おそらく漢語話者にとって男性子音字の g と h は紛れやすい音であったのであろう。学習者の注意を促す工夫である。

なお、aha と aga は、いわゆるミニマルペアーとなっている。見出し ga の下の「gala 手」と、次の行の見出し ha の下の「hala 姓」もミニマルペアーとなっている。単語の選択にも工夫を凝らしている。

bū 撥 [po]  
 pa 𠵿潘 [p<sup>h</sup>an] 窪 [ua] 切  
 pe 坡 [p<sup>h</sup>o]  
 pi 批 [p<sup>h</sup>i]  
 po 坡 [p<sup>h</sup>o]  
 pu 鋪 [p<sup>h</sup>u]  
 pū 坡 [p<sup>h</sup>o]  
 ta 他 [t<sup>h</sup>a]  
 da 搭 [ta]  
 te 𠵿偷 [t<sup>h</sup>ou] 哦 [ɤ] 切  
 de 得登 [təŋ] 哦 [ɤ] 切  
 ti 梯 [t<sup>h</sup>i]  
 di 低 [ti]  
 to 脱 [t<sup>h</sup>uo]  
 do 多 [tuo]  
 tu 秃 [t<sup>h</sup>u]  
 du, tū 都 [tu] ※ta の右行間に「同上字」との注記があるが、第Ⅱ類の文盛堂版にはこの注記は無

い。

ca 差昌 [tɕ<sup>h</sup>aŋ] 呀 [ia] 切  
 ce 車成 [tɕ<sup>h</sup>aŋ] 噫 [ie] 切  
 ci 七 [tɕ<sup>h</sup>i]  
 co 綽冲 [tɕ<sup>h</sup>uŋ] 窩 [uo] 切  
 cu 出 [tɕ<sup>h</sup>u]  
 cū 綽冲 [tɕ<sup>h</sup>uŋ] 窩 [uo] 切  
 ja 渣 [tɕa]  
 je 遮針 [tɕən] 噫 [ie] 切  
 ji 飢 [tɕei]  
 jo 拙 [tɕuo]  
 ju 朱 [tɕu]  
 jū 拙 [tɕuo]  
 ke 嗑 [k<sup>h</sup>ɤ]  
 ge 哥 [kɤ]  
 ki 欺 [tɕ<sup>h</sup>i] 咬字念  
 gi 鷄 [tɕei] 咬字念  
 ku 枯 [k<sup>h</sup>u]  
 gu 孤 [ku]

ká 喀康[k<sup>h</sup>aŋ]呀[ia]切  
 gá 噶剛[kəŋ]呀[ia]切  
 kó 顆空[k<sup>h</sup>uŋ]窩[uo]切  
 gó 郭[kuo]  
 tsá 擦倉[ts<sup>h</sup>aŋ]呀[ia]切  
 tsé 拆層[ts<sup>h</sup>əŋ]哦[ɤ]切  
 ts 吡[ts<sup>h</sup>ɿ] ※ローマ字翻字は取り敢えずメレンドルフによる。後に検討する。  
 tsó 蹉[ts<sup>h</sup>uo]  
 tsú 粗[ts<sup>h</sup>u]  
 dza 啞[tza]  
 dze 則[tsɤ]  
 dz 茲[tsɿ] ※ローマ字翻字はメレンドルフに無い。池上二郎(1955)「トゥングース語」は dz の末  
 尾及び単独の字形にこの文字を使用するので、取り敢えず池上氏により、子音のみ  
 の字形とする。  
 dzo 柞[tsuo]  
 dzu 租[tsu]  
 cý 吃[ts<sup>h</sup>ɿ] ※ローマ字翻字は取り敢えずメレンドルフによる。後に検討する。  
 jy 智[tsɿ] ※ローマ字翻字は取り敢えずメレンドルフによる。後に検討する。

中村：満文 k, p, t, c, k, ts', ts, c' に、漢語の無声“有気音”が対応し、満文 g, b, d, j, g, dz に、漢語の無声“無気音”が、ほぼ対応します。しかし、「du, tū 都[tu]」の tū だけが例外のように見えます。

吉池：おそらく漢字音による音注の都[tu]は、tū とは無関係で、du のみに付されたものでしょう。

中村：どういうことでしょうか。

吉池：『正字通』（1671年刊）に付された「十二字頭」（1670年の十二字頭用の序がある）の第一字頭を見ると「du 都」であり、その次は「la 拉」です。tū という音節そのものはありません。『清書指南』（康熙二十一年(1682)）には満字のみの十二字頭が付されていますが、「du」の後には「la」であり、やはり tū は無い。下って『清漢對音字式』（宣統元年(1909)）の第一字頭は、「du 都。杜。篤」の後には「la 拉。喇」であり、やはり tū はありません。伝統的な十二字頭の第一字頭に tū は無かったと推定できます。しかし『滿漢字清文啓蒙』（1730年題）は、tū という音節を採用することにした。採用の手順は、音注を付さない tū を、「du」と「都」の間に置いた。そのため、「都」が tū に付された漢字音注のように見えてしまっ

た、ということでしょう。

中村：もしそうであるならば、満文 k, p, t, c, k, ts, ts, c' に、例外無く、漢語の有気音に対応し、満文 g, b, d, j, g', dz に、例外無く、漢語の無気音に対応します。『正字通』に付された「十二字頭」（1670 年）の漢字音注はいかがでしょう。

### 『正字通』に付された「十二字頭」（1670 年）の漢字音

吉池：（明）張自烈（清）廖文英『正字通』（1671 年刊）の巻首に付された（清）廖綸璣撰「十二字頭」（1670）<sup>2</sup>の第一字頭の破裂音と破擦音を見ると次のとおりです。なお撰者の廖綸璣は漢人であり、「十二字頭」自体の作者も漢人であることは特殊な漢字音を用いる（贛客家方言による部分がある）ことから分かります。

ka 拷[k<sup>h</sup>y] ※正字通本文に「乞格切, 音客」とある。

ga 嘎[ka]

ko 課[k<sup>h</sup>y]

go 郭[kuo]

kū 庫[k<sup>h</sup>u]

gū 孤[ku]

ba 八[pa]

be 百[po]

bi 必[pi]

bo 剝[po]

bu 歩[pu]

bū 布[pu] ※中国工人出版社本の正字通に付された「十二字頭」の影印の満字は pū に見える。

国立公文書館デジタルアーカイブにより内閣文庫所蔵の単独版『十二字頭』（写本, 江戸）を見ると bū とする。

pa 帕[p<sup>h</sup>a]

pe 拍[p<sup>h</sup>ai]

pi 披[p<sup>h</sup>i]

po 破[p<sup>h</sup>o]

pu 舖[p<sup>h</sup>u]

pū 撥[po]

ta 他[t<sup>h</sup>a]

da 打[ta]

---

<sup>2</sup> 『正字通』影印、北京：中国工人出版社、1996 年。巻頭に、漢文による「十二字頭引」があり「康熙九年庚戌孟冬朔旦正黄旗教習廖綸璣撰」とする。ついで満文の「十二字頭」がある。

te	忒[tʰɤ]	
de	得[tɤ]	
ti	剃[tʰi]	
di	提[ti]	
to	拖[tʰuo]	
do	多[tuo]	
tu	兔[tʰu]	
du	都[tu]	
ca	察[tɕʰa]	
ce	宅[tɕai]	※正字通本文に宅は「初[tɕʰu]格切, 音宅」とある。なお宅は入声の澄母字。
ci	七[tɕʰi]	
co	綽[tɕʰuo]	
cu	出[tɕʰu]	
cū	初[tɕʰu]	
ja	查[tɕa]	
je	者[tɕɤ]	
ji	脊[tɕei]	
jo	卓[tɕuo]	
ju	諸[tɕu]	
jū	朱[tɕu]	
ke	克[kʰɤ]	
ge	革[kɤ]	
ki	基[tɕei]	*見母字
gi	幾[tɕei]	
ku	哭[kʰu]	
gu	故[ku]	
ká	搭[kʰɤ]	
gá	嘎[ka]	
kó	科[kʰɤ]	
gó	過[kuo]	
tśá	唵[tɕʰa]	※正字通本文に「初加切, 音差」とある。
tśé	冊[tɕʰə]	
ts	雌[tɕʰɿ]	
tśó	磋[tɕʰuo]	
tśú	粗[tɕʰu]	
dza	咱[tɕa]	

dze 則 [tsɤ]  
dz 咨 [tsɿ]  
dzo 佐 [tsuo]  
dzu 租 [tsu]  
cý 痴 [tʂʰɿ]  
jy 制 [tʂɿ]

中村：満文 k, p, t, c, k', ts', ts, c' に、漢語の有気音が対応し、満文 g, b, d, j, g', dz に、漢語の無気音がほぼ対応します。しかし、「ce 宅 [tʂai]」と「ki 基 [tɕi] (<[ki])」の2例が例外のように見えます。

吉池：「ce 宅 [tʂai]」については、『正字通』本文の「宅」の反切に「初 [tʂʰu] 格切, 音宅」とあり有気音となっています。「宅」は旧全濁声母の入声の澄母字（有声音）です。有声音の無声化の過程で、方言によっては、有気音となったり無気音となったりします。北京語では無気音ですが、『正字通』本文の反切では有気音です。『正字通』本文が反映する方言音（贛客家方言）に拠ったのでしょうか<sup>3</sup>。ki に無気音の基 [tɕi] (<[ki]) が付されることについて説明は困難です。

中村：誤字を持ち出すのは、最後の手段で好ましいことではありませんが、「基」は、或いは「碁」もしくは「碁」の誤写ということかもしれません。両字は旧全濁声母の平声の群母字なので、北方方言でも、贛客家方言でも、有気音の [kʰi] を想定することができます。

吉池：そのように考えて良いならば、「十二字頭」（1670年）中の第一字頭では、満文 k, p, t, c, k', ts', ts, c' に、例外なく、漢語の有気音が対応し、満文 g, b, d, j, g', dz に、例外なく、漢語の無気音が対応します。

中村：『寧古塔紀略』の満洲語口語の漢字音はいかがでしょう。

#### 『寧古塔紀略』満洲語の漢字音

吉池：『寧古塔紀略』については、竹越孝(1998)<sup>4</sup>に詳細な書誌の記述と語彙対照表があります。それによると同書の著者呉振臣は、父呉兆騫の流刑地である寧古塔（ニングタ。黒竜江寧安県）で生まれ（1664年）18年後に父の故郷江蘇呉江に帰郷し（1681年）、その後60

<sup>3</sup> 古屋昭弘(2009)『張自烈『正字通』字音研究』（東京：好文出版、113-202頁）は、『正字通』の反切に贛方言の音が反映されているとする。もと、1992年「正字通和十七世紀的贛方言」『中国語文』。

<sup>4</sup> 竹越孝(1998)「『寧古塔紀略』に見られる漢字音写満洲語語彙」『鹿大史学』45、1-19頁。

歳の頃（康熙六十年・1721）寧古塔での生活を回想してつづった『寧古塔紀略』を公にした  
とのことですから、作者は漢人です。その著書の中に漢字で音訳した満洲語があります。

中村：1664年から1681年の18年間に習得した満洲語を、1721年に故郷の江蘇呉江で著書  
にまとめたわけですから、満洲語自体は、1664年から1681年に習得した満洲語ということ  
になります。ところで、著者の呉氏はどのような言葉の環境で育ったのでしょうか。

吉池：竹越孝(1998)は、父の兆騫が故郷の母親に子である振臣の様子を知らせた書信を紹介  
します。それによると、呉江の漢語方言を話し、漢語の官話（役人の言葉）や満洲語を習得  
していく様子を窺うことができます。父親の呉兆騫は同じ境遇の文人たちと詩社を結成す  
るなどしたようです。漢人の社会があり、子の呉振臣も漢人の社会の中で育ったと想定して  
良いでしょう<sup>5</sup>。そうすると、漢語が第一言語であったことになります。呉振臣の発音の習  
慣として、家庭内で/p<sup>h</sup>/≠/p/≠/b/という三分法の対立を持つ江蘇の呉江方言に接し、外で  
は/p<sup>h</sup>/≠/p/という二分法の対立をもつ北方官話に接していたと想定することができそうで  
す。

中村：呉振臣は漢人社会で育ち、第一言語は中国語で、満洲語もある程度できたということ  
ですね。『寧古塔紀略』にある漢字で音写した満洲語は、中国人の立場で習い覚えた17世  
紀後半（1664～1681年に習得した満洲語）の黒龍江寧安県あたりの満洲語口語を、漢字音  
で表記したということになります。満洲語口語を音写した漢字音に、破裂音と破擦音の二分  
法は、どのように反映しているのでしょうか。

吉池：これまでたびたび引用した竹越孝(1998)が参考になります。当該論文は満洲語文語の  
字母に音訳漢字を対応させた一覧表を含みます。その中から満文 b, d, t, j, c, g, k と音訳漢  
字との対応を抜き出すと次の通りです。いま参考のため、音声を[p>p]のように付します。  
左は平山久雄(1967)の中古音<sup>6</sup>、右は現代北京語音です。漢字の後の()内の数字は使用され  
る回数です。なお、通常は、満文 b, d, j, g に、漢語の同じ調音位置の無気音が対応し、満文  
t, c, k に、漢語の同じ調音位置の有気音が対応するのですが、対応から外れるものに下線と  
用例を付しました。例えば「法拖(袋)文語 fadu」は、「漢字音訳語+(意味)+満洲語文語形」

---

<sup>5</sup> なお『寧古塔紀略』によると、寧古塔は内城と外城からなり、漢人は外城の東西の2門の外  
外に住んでいたとのこと。呉氏の家は初め東門の外にあったが、その後、漢人は皆、城  
中に移され、呉家は西門の内側に移ったとあります。「周八里，共四門，南門臨江，漢人各  
居東西兩門之外。予家在東門外，・・・・。後因吳三桂造逆，調兵一空，令漢人俱徙入城  
中，予家因移住西門内。」（姜維公、劉立強(2014)『東北边疆卷 八 柳辺紀略 龍沙紀略 寧古  
塔紀略』中国边疆研究文庫，哈爾濱：黒龍江教育出版社）。

<sup>6</sup> 平山久雄(1967)「中古漢語の音韻」『中国文化叢書 I 言語』東京：大修館書店、五版 112-  
166 頁による。一部の表記を便宜上一般的な表記に改めた。t'を t<sup>h</sup>に、tʂを tʂに。

です。

中村：まず、満文 b, d, j, g の例を挙げ検討し、次いで満文 t, c, k の例を挙げ検討するという順番でいきましょう。

### 満文 b, d, j, g に対応する例について

吉池：満文 b, d, j, g に対応する音訳漢字は次の通りです。

- ①満文 b に、漢語の無気音の幫母字 [p > p] が対応する：拜(1)、頒(1)、邦(1)、百(1)、鱉(1)、不(3)、波(1)、畢(1)、必(2)
- ②満文 d に、漢語の無気音の端母字 [t > t] が対応する：打(5)、得(1)、多(2)、對(1)  
満文 d に、漢語の有気音の透母字 [t<sup>h</sup> > t<sup>h</sup>] が対応する：拖(1)、法拖(袋)文語 fadu
- ③満文 j に、漢語の無気音の莊母字 [t<sub>ʃ</sub> > t<sub>ʃ</sub>] が対応する：查(1)、壯(1)  
満文 j に、漢語の無気音の章母字 [t<sub>ʃ</sub> > t<sub>ʃ</sub>] が対応する：者(2)、朱(4)  
満文 j に、漢語の無気音の精母字 [ts > t<sub>ʃ</sub>] が対応する：濟(4)、即(3)  
満文 j に、漢語の無気音の見母字 [k > t<sub>ʃ</sub>] が対応する：甲(1)、甲工(八)文語 jakūn
- ④満文 g に、漢語の無気音の見母字 [k > k] が対応する：該(2)、格(3)、根(2)、哥(1)、姑(1)  
満文 g に、漢語の調音位置が異なる曉母字 [h > x] が対応する：漢(3)、又而漢濟(女)文語 sargan jui、又而漢(妻)文語 sargan、又而漢朱子(丫頭)文語 sargan juse  
満文 g に、漢語の有気音の溪母字 [k<sup>h</sup> > k<sup>h</sup>] が対応する：喀(1)、喀不他米(射箭)文語 gabtambi  
満文 g に、漢語の調音位置が異なる疑母字 [ŋ > j, ゼロ] が対応する：牙(1)、我(1)、吾(2)、銘牙(千)minggan、佞我(六)ninggun、蒙吾(銀)menggun、貪吾(百)tanggū

中村：これを見ると、満文 b, d, j, g に対応する音は 55 回使用され、その 55 回に対して同じ調音位置の“無気音”を使用する例は 46 回です。この 46 回について問題はありません。同じ調音位置の“有気音”を使用する例は 2 回で問題となり説明が必要です。また、“異なる調音位置の音”を使用する例は 7 回あり、これについても説明が必要です。

まず、同じ調音位置の有気音を使用する 2 回の例から始めましょう。なにかしら説明は可能でしょうか。

### 法拖の拖について

吉池：一つ目は、②満文 d に、漢語の有気音の透母字 [t<sup>h</sup> > t<sup>h</sup>] が対応する例です。文語 fadu(袋)に相当する語を「法拖」と表記するものです。仮に、この表記から文語形を復元すると fato になります。

中村：現代方言や過去の資料での表記はどのようでしょう。

吉池：手もとの資料により、対応する現代方言を見ると、山本謙吾(1969)『基礎語彙集』<sup>7</sup>は簡略表記で[fad]とします。これ以外は見つかりません。

中村：1例では心許ないですが、この[d]は精密表記で半有声音の[d]ですから、文語 fadu の d と符合します。これに対して、「法拖」の「拖」は有気音で、文語の to に対応する表記ですから、両者は符合しませんね。他の1例はいかがでしょう。

### 喀不他米の喀について

吉池：二つ目の例は、④の満文 g に、漢語の有気音の溪母字[k<sup>h</sup>>k<sup>h</sup>]が対応する例です。文語 gabtambi に相当する語を「喀不他米」と表記します。これを文語風のローマ字に直して表記すると「喀不他米」kabtami となります。

中村：対応する現代方言と過去の資料はいかがでしょう。

吉池：山本謙吾(1969)『基礎語彙集』は[gaftəm]とし、李樹蘭・仲謙(1986)『錫伯語簡誌』<sup>8</sup>は[gavtəm]とし、清格爾泰(1982)「口語語音」<sup>9</sup>は[gabtume]とします。古資料の表記を、竹越孝(1998)の一覧表の表2によって見ると『韃靼漂流記』(1644年)に「がふた」とあり、この「が」は文語の ga に対応する表記であり、現代方言と符合します。

中村：現代方言および古資料は、いずれも漢語有気音の「喀」と合いませんね。漢語有気音の、「法拖」の「拖」to、および「喀不他米」の「喀」ka を利用した理由を見出すことはできず、例外とするしかありません。

さて、異なる調音位置の音を使用する例は7回です。これについて検討しましょう。

### 調音位置が異なる音：又而漢の漢

吉池：異なる調音位置の音を使用する例は、④の満文 g に相当する部分に、曉母字[h>x]を使う次の3例です。「又而漢濟(女)」文語 sargan jui、「又而漢(妻)」文語 sargan、「又而漢朱子(丫頭)」文語 sargan juse。

中村：いずれも文語 sargan に相当する語は「又而漢」ですね。現代方言と過去の資料の記述はどのようでしょう。

---

<sup>7</sup> 山本謙吾(1969)『満洲語口語基礎語彙集』東京：アジア・アフリカ言語文化研究所。

<sup>8</sup> 李樹蘭・仲謙(1986)『錫伯語簡誌』北京：民族出版社。

<sup>9</sup> 清格爾泰(1982)「満語口語語音」『内蒙古大学学报(哲学社会科学版)』。(1998)『清格爾泰 民族研究文集』232-355, 北京：民族出版社所載による。

吉池：『寧古塔紀略』は、文語 sargan に相当する語を「叉而漢」と表記します。これを文語風のローマ字に直して表記すると「叉而漢」は carhan となります。対応する現代方言を見ると、山本謙吾(1969)『基礎語彙集』は[sarɕən]妻とします。李樹蘭・仲謙(1986)『錫伯語簡誌』の対応はやや不安ではありますが、[saχəndzi]青年女子(未婚的)、女兒があります。清格爾泰(1982)「口語語音」は[sarɕən]妻、[sa:ɕandze:]姑娘(文語 sargan jui)とします。清格爾泰(1982)の[sɑ:ɕandze:]姑娘(文語 sargan jui)から見て、李樹蘭・仲謙(1986)の[sɑχəndzi]は、文語 sargan と関係のある語でしょう。

中村：文語 gan に相当する部分が、有声摩擦音[ɕən]と無声摩擦音[χən]で出ています。この満洲語音を、漢人が有声摩擦音の無い北方漢語によって表記する場合、区別なく無声摩擦音の「漢」han を利用したとしても違和感はありません。古資料の状況はいかがでしょう。

吉池：古資料の表記を集めた竹越孝(1998)の一覧表の表2を見ると、「叉而漢濟(女)」文語 sargan jui に対応するものとして、女真訳語(丙種)の「撒藍追」、韃靼漂流記の「さるはせ」が有ります。また、「叉而漢(妻)」文語 sargan に対応するものとして、女真訳語(乙種)の「撒里安」、女真訳語(丙種)の「撒刺」が有ります。

中村：女真訳語(丙種)の語形には、文語 gan に相当する部分はないようです。韃靼漂流記の「さるはせ」の「は」は、文語 gan に相当する部分です。この「は」がどのような音であったか興味深いですね。

吉池：日本語のハ行音について、森田武(1977)<sup>10</sup>によると、「契沖の『和字正濫抄』に、ハは「唇の内に触て軽く」発音するとあるから、なお[ɸ]であったろうが、『蜩縮涼鼓集』(一六九五)で、従来マ行とともに唇音とされていたハヒフヘホを、マ行とは別にして「変喉」と認めたのは、ハ行音が喉音化していたからである。」(265頁)と二様の記述があります。『和字正濫抄』の刊行は1739年ですが、契沖の生年は1640-1701年とされるので、二書が反映する音の時期は、『韃靼漂流記』(1644年)より、やや後です。『韃靼漂流記』当時の日本の一地方(著者は越前の商民。現在の福井県あたり)の日本語のハ行音のハ音が[ɸa]であったか[ha]であったか、微妙なところで、確かなことは言えません。仮に、当時の福井一帯のハが、[ɸa]のような両唇を寄せる音であったとしても、日本語に[ha]が無かったとしたら、満洲語の ha にハ[ɸa]を当てるしか音訳の方法は無かったということになります。しかし「は」という表記に依り、少なくとも、文語 gan の g に相当する口語が、破裂音の[g]や[q]ではなく、摩擦音であったことは推測できます。

---

<sup>10</sup> 森田武(1977)「音韻の変遷(3)」『岩波講座 日本語 5 音韻』東京：岩波書店、253-280頁。

中村：文語 sargan に相当する語を「叉而漢」carhan とする 3 例の gan と han の対応については、ある程度説明が可能なようです。また、無気音と有気音の対応の検討とは直接には関わらないので、この 3 例は除いてもいいのでしょうか。

④の満文 g に、漢語の調音位置が異なる疑母字[ŋ]が対応する 4 例はいかがでしょう。

#### 調音位置が異なる音：疑母字[ŋ]

吉池：④の満文 g に相当する語に、疑母字[ŋ > j, ゼロ]を使う例は次の 4 例です。

銘牙(千)minggan、佞我(六)ninggun、蒙吾(銀)menggun、貪吾(百)tanggū

中村：旧疑母字の牙[ŋa > ia]、我[ŋa > uo]、吾[ŋo > u]は、現代北京語では[ŋ]が脱落するけれども、『寧古塔紀略』の著者の漢語には疑母[ŋ-]があったのでしょうか。満文 ming、ning、meng に相当する満洲語口語の音節末の ng[-ŋ]の後で、同化によって破裂音が鼻子音[ŋ-]となっていた。その鼻子音を漢語の疑母[ŋ-]で表記したのでしょうか。

吉池：清格爾泰(1982)「口語語音」によると、[miŋŋa:](千)、[niŋŋun ~ niŋŋun ~ niŋŋun](六)、[muŋŋun](銀)、[taŋ ~ taŋŋŋ](百)、とあるから、『寧古塔紀略』の満洲語口語も同様に[ŋ-]があったと見て不都合はありません。もしくは、山本謙吾(1969)『基礎語彙集』は[miŋan](千)、[niŋun](6)、[mɛŋun, muŋun](銀)、[taŋ](百)とするが、この内[taŋ]は除いたとしても、[miŋan]や[niŋun]や[mɛŋun, muŋun]の[-ŋ-]を、[-ŋŋ-]と聞き取るということも有り得ます。

そうするとこの 4 例も、文語 g との対応から削除して良いでしょう。

中村：満文 b, d, j, g に対応する音は 55 回使用されるとしましたが、そこから、調音位置が異なる曉母字[h > x]を使った 3 例と疑母字を使った 4 例を差し引くと 48 例となり、その内同じ調音位置の“有気音”を使用する 2 例が説明のつかない例外となります。

次に。満文 t, c, k の例を挙げ検討しましょう。

#### 満文 p, t, k, c に対応する例について

吉池：満文 p, t, k, c に対応する音訳漢字は次の通りです。

⑤満文 p：用例無し

⑥満文 t に、漢語の有気音の透母字[t<sup>h</sup> > t<sup>h</sup>]が対応する：貧(1)、他(2)、突(1)、土(1)、托(1)、帖(2)

⑦満文 c に、漢語の無気音の精母字[ts > tɕ]が対応する：嗟(1)、温嗟蜜(賣)文語 uncambi

満文 c に、漢語の有気音の清母字[t<sup>h</sup> > t<sup>h</sup>]が対応する：促(1)

満文 c に、漢語の有気音の昌母字[tɕ<sup>h</sup> > tɕ<sup>h</sup>]が対応する：扯(1)、赤(1)

⑧満文 k に、漢語の有気音の溪母字 [k<sup>h</sup>>k<sup>h</sup>, tɕ<sup>h</sup>(吃)] が対応する：喀(1)、克(4)、枯(1)、庫(3)、吃(1)

満文 k に、漢語の調音位置が異なる匣母字 [ɦ>h] が対応する：哈(1)、又不哈(箸) sabka

満文 k に、漢語の無気音の見母字 [k>k] が対応する：工(1)、甲工(八) jakūn

中村：これを見ると、満文 p, t, k, c に対応する音は 24 回使用され、その 24 回に対して同じ調音位置の“有気音”を使用する例は 21 回です。この 21 回について問題はありませぬ。同じ調音位置の“無気音”を使用する例は 2 回で問題となり説明が必要です。また、“異なる調音位置の音”を使用する例は 1 回あり、これについても説明が必要です。

まず、同じ調音位置の無気音を使用する 2 回の例から始めましょう。なにかしら説明は可能でしょうか。

### 温嗟蜜について

吉池：一つ目の例は、文語 uncambi(賣)に相当する語を「温嗟蜜」と表記する例です。これを文語風のローマ字に直して表記すると「温嗟蜜」は unjemi となります。「嗟」は開口三等平声麻韻の精母ですから [tsɿa(中古音)>tsiɛ(中原音韻)<sup>11</sup>>tɕie, tɕye(現代北京語)] と推定することができます。手もとにある資料により、対応する現代方言を見ると、山本謙吾(1969)『基礎語彙集』は [ʔuntɕam] (売る。[tɕ] の精密表記は有気音の [tɕ<sup>h</sup>])、李樹蘭・仲謙(1986)『錫伯語簡誌』は [untɕam bum] (賣。[tɕ] の精密表記は有気音の [tɕ<sup>h</sup>])、清格爾泰(1982)「口語語音」は [untɕa:me] (賣。[tɕ] の精密表記は有気音の [tɕ<sup>h</sup>]) です。

中村：問題の文語 ca は、ほぼ現代方言の [tɕa] ([tɕ] の精密表記は有気音の [tɕ<sup>h</sup>]) に対応し、「嗟」が無気音の [tsiɛ(中原音韻)>tɕie, tɕye(現代北京語)] となると、両者は子音も母音も合わないということになります。

吉池：そうなのです。「嗟」は、「差」(開口三等平声麻韻の初母)として使用されたものか、もしくは、「差」の誤記ではないかと考えています。「差」であるならば、[tɕ<sup>h</sup>a(中原音韻)>tɕ<sup>h</sup>a(現代北京語)]であり、子音も母音も合います。

中村：なるほど。次に⑧の文語 jakūn(八)に相当する語を「甲工」と表記する例はいかがでしょう。

### 甲工について

吉池：文語 jakūn(八)に相当する語を、「甲工」と表記します。これを文語風のローマ字に

---

<sup>11</sup> 楊耐思(1981)『中原音韻音系』北京：中国社会科学出版社。

直して表記すると、「甲工」は、現代北京語で[tɕia kʊŋ]なので、jagūn となります。対応する現代方言を見ると、山本謙吾(1969)『基礎語彙集』は[dzʌqɔŋ] ([q]の精密表記は有気音の[qʰ])とし、李樹蘭・仲謙(1986)『錫伯語簡誌』は[dzʌqʊŋ] ([q]の精密表記は有気音の[qʰ])とし、清格爾泰(1982)「口語語音」は[dzʌʎɔŋ]とします。文語 kūn に相当する現代方言音は有気音ですから、無気音の工[kʊŋ]gūn とは合いません。

中村。満洲語の古資料はいかがでしょう。

吉池：竹越孝(1998)の一覧表の表2によって見ると『韃靼漂流記』(1644年)に「チャゴ」とあり、『愁州謫録』(1757-1759年に聞いた口語語彙)<sup>12</sup>に「jiagon」とあります。これらの日本語カタカナ表記の「ゴ」と、朝鮮語ハングル表記の「gon」によると、満洲語文語のgに対応する音とみることができます。

中村：そうすると、『寧古塔紀略』(1664~1681年に習得した満洲語)の「甲工」と、文語 jakūn および現代満洲語音とは合わないけれども、古資料の『韃靼漂流記』や『愁州謫録』とは合う。「甲工」を古資料の系統の音と見れば、文語のgに対応する音と漢語の無気音が正しく対応している例となりますね。

最後に、⑧の満文 k に、漢語の調音位置が異なる匣母字[h>h]を使う例はいかがでしょう。

#### 調音位置が異なる音：又不哈の哈

吉池：満文 sabka(箸)に相当する語に、「又不哈」が対応します。これを文語風のローマ字に直して表記すると、「又不哈」は cabha となります。山本謙吾(1969)『基礎語彙集』は[safq]で[q]が対応し、李樹蘭・仲謙(1986)『錫伯語簡誌』は[savq]で[q]が対応し、清格爾泰(1982)「口語語音」は[sɑ:pʎɑ]で[ʎɑ]が対応します。

中村：満洲語文語と現代満洲語方言では、破裂音が対応し、漢字音の「哈」は摩擦音なので合いませんね。過去の資料はいかがでしょう。

吉池：竹越孝(1998)の一覧表の表2によって見ると、女真訳語(甲種)に「撒本哈」、女真訳語(丙主)に「撒扒」とあります。Kiyose, G. N. (1977)<sup>13</sup>によって見ると、「茶斝 撒

---

<sup>12</sup> 「朝鮮の英祖 33 年から 35 年まで (1757-1759) 図們江南岸の愁州 (鍾城) に流謫されていた尹昌屋が、その著『愁州謫録』に同地方の満洲口語語彙を「清學音」として附載したもの。ソウル大学校中央図書館蔵鈔本に基づく李基文 1973 による。同書のハングルは河野六郎 1947 の方式に従ってローマ字転写する。」(竹越孝(1998)、13 頁)。

<sup>13</sup> Kiyose, G. N. 【清瀬義三郎則府】(1977) *A Study of the Jurchen Language and Script.*

本哈」のローマ字転写を sabunha とします。この「哈」の当時の漢字音は無声の喉の摩擦音であり、「女真文字は略す 哈魯温 halgun 熱」、「女真文字は略す 塔思哈 tasha 虎」のように、喉の摩擦音 ha とする音の表記に常用されます。しかし、「女真文字は略す 哈荅刺埋 kadalamaï 官」、「女真文字は略す 阿卜哈 abka 天」、「女真文字は略す 哈沙 gaša 村」、「女真文字は略す 安哈 amga 口」などのように、破裂音の ka や ga とする音の表記にも使用されます。

中村：問題の「撒本哈」の「哈」は、満洲語文語で sabka、山本謙吾(1969)『基礎語彙集』で[safq]、李樹蘭・仲謙(1986)『錫伯語簡誌』で[savq]、清格爾泰(1982)「口語語音」で[sa:pʰχa]、いずれを見ても破裂音が想定されます。Kiyose, G. N. (1977)は、「撒本哈」を sabunha とするわけですが、清瀬氏は、何を根拠として「哈」を摩擦音の ha としたのでしょうか。

吉池：問題の「撒本哈」の「哈」は女真文字の「𡗗」を音訳したものです。この「𡗗」を含む単語は、Kiyose, G. N. (1977)によると、女真訳語（甲種）の「雑字」（単語集）に、重複するものも含めて 26 有ります。この 26 例に、満洲語の文語形を対応させると、「𡗗 哈」に喉の摩擦音が対応するもの 16 例、破裂音が対応するもの 1 例、対応する文語形が不明なもの 9 例となります<sup>14</sup>。これによると、「𡗗 哈」は、満洲語文語の喉の摩擦音 ha に対応すると見ていいのでしょうか。

破裂音に対応する例外の 1 例は、いま問題にしている「撒本哈」の「哈」です。女真訳語

---

Kyoto : Hōritsubunka-sha.

<sup>14</sup> 列挙に当って、女真文字は省略し、() 内に山本謙吾(1969)『基礎語彙集』を利用して、満洲語文語と音声（錫伯語）を示す。

■対応する文語形が摩擦音の単語 16 例

012 斡失哈 ošiha 星 (文:usiha[ʔuʃχaʼ])、066 牙哈 yaha 炭 (文:mooi yaha[məʼi jaχ])、157 哈哈 gaha 鴉 (文:gaha[gaχ])、159 嫩捏哈 niyonniyaha 鵝 (文:nionniyaha[ɲyɲɲaχ])、163 里襪哈 liwaha 魚 (文:nimaha[ɲimɓaʼ])、166 兀滅哈 umiyaha 蟲 (文:umiya, imiyaha[jimaχ, ɲimaχ])、252 哈子哈 haʃiha 剪 (文:hasaha【後部の ha】[χasχ])、262 只哈 jiha 錢 (文:jiha[dʒɪɓaʼ])、278 鈔哈厄者黑 čauha ejehei 武職 (文:cooha[tʃǎχ]兵たい)、296 鈔哈 čauha 軍 (文:cooha[tʃǎχ]兵たい)、360 塔哈 taha 體 (文:daha[daβəm]~のあとにつく、こうさんする)、361 塔哈 taha 順 (文:daha[daβəm]~のあとにつく、こうさんする)、478 的黑黑吉塔哈 dihehegi taha 歸順 (文:daha[daβəm]~のあとにつく、こうさんする)、507 都哈 duha 腸 (文:duha[duɓaʼ])、546 古刺哈 gulaha 靴 (文:gūlha[ɢɔɓaʼ])、575 只哈 jiha 錢 (文:jiha[dʒɪɓaʼ]) 【262 と重複】

■対応する文語形が破裂音の単語 1 例

257 撒本哈 sabunha 筋 (文:sabka)

■対応する文語形が不明な単語 9 例

267 滅良哈 miyaliyanha 升 (文:?)、488 南哈洪半的姪 namhahun bandihai 安生 (文:?)、519 秃哈 turha 瘦 (文:?)、567 沙木哈 šamuha 暖耳 (文:?)、682 南哈洪 namhahun 安 (文:?)、688 吉撒哈 gisaha 碎 (文:?)、694 一兒哈洪 irhahun 淺 (文:?)、726 扎魯哈 jaluha (文: ? jalu[dzaluʼいっぱい(の,に)])、838 扎哈 jaha 件 (文:?)

(甲種)では、「撒本哈」の「哈」は ha であつたが、満洲語文語では ka とされたということでしょう。理由はわかりません。

中村：『寧古塔紀略』（1664～1681年に習得した満洲語）の満洲語口語は「又不哈（箸）」sabha であり、満洲語文語は sabka(箸)です。女真訳語（甲類）で sabunha であるから、当時の満洲語方言の中には、sabha のように摩擦音のものが有ったかもしれません。また、現代方言の清格爾泰(1982)「口語語音」は[sɑ:pʰχɑ]で[ʰχɑ]とし、破裂音の摩擦音化がだいぶ進んでいます。『寧古塔紀略』の満洲語口語も同様であつた可能性は皆無ではないので、著者である漢人の呉振臣が、[ʰχɑ]を[xɑ]と聞き取り、「哈」ha と表記したという事かもしれません。もっとも、いずれも想像の域をでないので、調音位置が異なるこの例については今後の課題としましょう。

そうすると満文 p, t, k, c に対応する音は 24 回使用されるとしましたが、そこから、調音位置が異なる「又不哈（箸）」の 1 例を差し引くと 23 例となり、同じ調音位置の無気音を使用する 2 回の例については説明が可能で対応上の不都合はありません。

吉池：満文 b, d, j, g と p, t, k, c を合わせて 79 回使用され、そこから調音位置を異にする 8 例を引くと 71 例となります。有気音と無気音の対応について、説明が困難な例外は 2 例です。満文 b, d, j, g に漢語の無気音が対応し、満文 p, t, k, c に漢語の有気音が対応する例は 69 例で、対応しない例は 2 例となります。

中村：以上によると、『寧古塔紀略』の満洲語と漢語の、破裂音と破擦音の対応は、ほぼ次のようなものとなります。

満洲語 t, k, c	←	漢語の無声有気音の [ t <sup>h</sup> , k <sup>h</sup> , tʂ <sup>h</sup> , ts <sup>h</sup> ]
満洲語 b, d, g, j	←	漢語の無声無気音の [ p, t, k, tʂ, tc ]

ところで、漢語の無声有気音と無声無気音に、旧全濁音字（有声音）は含まれないようすが。

吉池：竹越孝(1998)に、満洲語文語と漢字音訳を対応させた一覧表が掲載されています。それを見ると、旧濁音字の使用を巧みに避けているように見えます。文語の j, c に相当する語も同様で、旧全濁音字は使用されません。旧全濁音字は、前節の贛客家方言の記述で見たように、地域の違いにより、また声調の違いにより、異なる音となるので、やっかいです。

- ・文語の b には“全て”漢字の幫母字（無声無気）を対応させる。
- ・文語の d には“ほぼ”漢字の端母字（無声無気）を対応させる。
- ・文語の j には漢字の莊、章、精、見母字（いずれも無声無気）を対応させる。
- ・文語の g には“多く”漢字の見母字（無声無気）を対応させる。

- ・文語の t には“全て”漢字の透母字（無声有気）を対応させる。
- ・文語の c には漢字の精（無声無気音。初母（無声有気）の誤か）、清（無声有気）、昌（無声有気）母字を対応させる。
- ・文語の k には“ほぼ”漢字の溪母字（無声有気）を対応させる。

中村：もしも旧濁音字の使用を避けたとしたならば、それは、漢字音写満洲語を、南方の文人が見ても、北方の文人が見ても、誤解を生じることが無いようにとの配慮でしょう。

吉池：『寧古塔紀略』が公にされたのは、60歳の頃（康熙六十年・1721）とのことですが、漢字音訳満洲語の資料自体は、おそらく、寧古塔に居た時に作られたものでしょう（呉氏本人によるものか、漢人社会で使用されていたものか分からない）。帰郷後だとしても、それほど時を経ずに作られたもので、60歳の頃に満洲語を思い出し漢字で音訳したとは考えにくい。

中村：18歳まで北方の漢人社会で育ったわけですから、北方の官話によって満洲語口語を音写したメモを作成した、と見て特段の不都合はありません。その場合、無声有気音（/p<sup>h</sup>/, /t<sup>h</sup>/, /k<sup>h</sup>/など）と無声無気音（/p/, /t/, /k/など）の二分法の立場から音訳したと想定することができます。旧濁音字の使用を避けているとしたら、それは後に調整したのでしょうか。

## 二分法の対立

吉池：古資料の『滿漢字清文啓蒙』（1730年題）、廖綸璣撰「十二字頭」（1670）、『寧古塔紀略』（1664～1681年に習得した満洲語）のいずれも、満文 k, (p), t, c, k', ts', ts, c' に、漢語の有気音が対応し、満文 g, b, d, j, g', dz に、漢語の無気音が対応します。

漢語の旧全濁音字（有声音）を除き、いずれの時代においても、漢語の旧全清音はほぼ無声無気音、旧次清音は無声有気音となるので、17世紀においても現代北京語のようであったとすることができます。

そこで、上記のような対応をどの様に見るかということですが。

中村：17世紀の満洲語の二分法の対立が、無声有気音と無声無気音によっており、現代方言の東の満洲語と同様であったと見ても、特段の不都合は無いということでしょう。

吉池：西の錫伯語のように無声音と有声音の対立であったとしたならば、どうでしょう。服部四郎・山本謙吾(1956)「体系と構造」の錫伯語の合成語に見られたような無声有気音の無気音化や、服部四郎(1937)「一資料」で見られたような満文 c の有気性の弱化があった場合、理屈の上では、そのような音に対して、漢語の無声無気の弱音 (lax) を当てることも

あり得ます。

中村：無声音と有声音の対立であった場合、対応は乱れるかもしれませんが、少なくとも、上の三資料については、そのような現象は見られないようです。そうであるならば、満洲語の二分法の対立が、無声有気音と無声無気音であったと想定して特段の不都合はありません。

もつとも、三資料だけでなく、十分な量と質の対音資料を集め検討したならば、新たな展開があるかもしれませんが、それは今後の課題です。

吉池：我々の文字表の暫定案では、ほぼ服部四郎(1937)「一資料」の音声表記によって、半有声無気音[b̥, d̥, ɡ̥]と、無声有気音[p<sup>h</sup>, t<sup>h</sup>, k<sup>h</sup>]としているのですが、これを改める必要があります。

17世紀の満洲語は、現代方言の東の満洲語のように、無声無気音の弱音(lax)と無声有気音の対立であったと想定して、補助記号[.]を半有声音としてではなく、無声無気音の弱音(lax)として使用することを明記して[b̥, d̥, ɡ̥]を採用し、無声有気音[p<sup>h</sup>, t<sup>h</sup>, k<sup>h</sup>]と対立させる、ということではいかがでしょう。

中村：十分な量と質の対音資料を集め検討するまでの暫定の措置と言うことであるならば異存はありません。

吉池：それでは今回はこれまでとし、次回は、満文の破擦音jおよびcの音声を、「そり舌音」[tʂ]とすべきか、それとも「後部歯茎音」[tʃ]とすべきか、ということについて検討しましょう。